

バクの会話。

「うちの娘、もう適齢期やのになかなか結婚しようと思えへんねん」

「うちもそやねん。ほんま、いつまでも親のすねかじってて困ったもんやわ。わてら、もう身体が言うことときかんようになってきたのに、いつまで親働かす気いやろ」

「うちの娘も一緒や。独身が気楽でええとか抜かして。最近のバクは、結婚せえへんなあ。親が死にかかってるちゅうのに」

これがほんとの「嫁行くバクもない」。

えーと、唐突にはじまったので何のこっちゃと思っておられるひとも多いかと思いますが、続いて、蚊の会話。

「(ぶん) 今度、ともだちが結婚するねんけど、披露宴に着ていく服がないねん」

「(ぶん) うちもそや。新しい服作るの、お金かかるからなあ。これがほんとの「蚊衣装なし」。

えーと、まだまだとまどっておられるかたも多いかと思いますが、続いて、パンダの会話。

「上野動物園の東々(トントン)、長いこと病気患ってたけど、どないになったんや?」

「死んだて聞いたで」

「ちやうちやう。手術で一命をとりとめたんやけどな、世の無常を感じて、坊主になったらしいわ」

これがほんとの「東々(トントン)病死に、出家して……」。

きりがないのでこのあたりでやめましょう。

最近、しょっちゅう落語会に行く。こないだなんか、二日連続だ。仕事はしているのか、とのお言葉ではございますが、そうなんです、これが仕事なんです。落語会に行くのが仕事？ そんな馬鹿な。そうおっしゃるのはごもつとも。しかし、本当なんです。生の落語を聴くのは、この「ラクゴ・ザ・フューチャー」を書くために必要な取材なのである。皆さんにもぜひおすすめしたいが、生の落語はいいですよ。テレビの落語というのは、あれは実はあまりおもしろくないのである。あんなものを見て「落語っておもしろくないなあ」と思わないでいただきたい。すでに落語を好きになったひとが、一種の追体験として見るのはOKである。つまり、そういうひとは落語のおもしろさを知っているから、テレビ落語に欠けているいろいろな要素を頭のなかで補うことができるわけだ。それができないひとには、テレビの落語は単に「画面のなかでじっと動かずに、ひとりの人間がしゃべっているだけ」の芸に見えるだろう。このことは、ほかの芸能にもあてはまる。歌舞伎にしても狂言にしても小劇団の芝居にしても、はまるひとというのはたいてい生で見たからである。テレビでも歌舞伎とか芝居とかいろいろやってるけど、生の舞台にあふれている「活気」がまったくなくなってしまっている。これは、びっくりするけど、ほんとにすっかりなくなってしまったているのだ。だから、そういうものを生で見にいくと、ギャップに驚くことになる。音楽でもそうである。CDで聴いているだけではそのミュージシャンの、そのバンドの本当の姿はわからない。ジャズでもロックでも、目の前でリアルタイムでミュージシャンが汗をたらたら垂らしながら演奏している姿を見つめながらその音楽を享受するというのは、ミュージシャンと客が何かを共有しているわけで、あとでCDを聴

いても、決してその場にいた客のような「共有」はできないのである。もちろん、ライブは絶対にしないミュージシャンも存在するが、そういうひとの音楽は最初から何かを捨てているわけで、立脚点がちがうのだ。ちよつとちがうかもしれないけど、マンガの原画というやつ、あれも一度は見たほうがいいですよ。印刷されたものとはまるでちがう、いきいきとした熱気が伝わってくる。私は昔、高校生のころ、手塚治虫や矢口高雄、さいとうたかを、水木しげる、松本零士などの原画を見て、あまりにすばらしいので感動し、以来、「マンガというものは、原画にちかいほどよい」という説を信奉している。つまり、原画のサイズに近い縮尺のものほどその良さが伝えられるわけであって、だから、今はやりの文庫マンガなど論外である（そのわりによく買うけど）。あんなに小さくなってしまつては、絵は単なるストーリーを助ける道具にすぎず、芸術性は極端に失われてしまつていると思う。えーと、何の話だつたかな。そうそう「生」の良さである。とにかく一度、落語を生で見に行つてほしい。そしたら、たぶんあなたは落語好きになる。ファン、にはならなくても、少なくとも落語を嫌いではなくなると思う。不思議なのは、生でない場合は、落語は音だけのほうがよい。今は落語のDVDとかいっぱい出ているが、そういうものを見ても、なんか物足りない。「絵」がじゃまなのである。落語というのは、客に想像を強いる芸であつて、数人の人物をひとり演じわける。客は、自分の頭のなかで、その人物をそれなりに思いえがかなければ、ぜんぜんおもしろくないのである。だから、演者の顔かたちが画面にドーンと出てくるDVDでは、その顔かたちが想像の邪魔になるのだ。家で聴くときは、落語はテープのほうがいいと思う。枝雀のような、視覚的要素が重要と思われるような噺家ですら、そうなのだ。だから、

私は枝雀のDVDよりも、レコードの枝雀十八番のほうがずっと好きだ（枝雀の場合は、そういう以前に、生きて動いている姿を見るのがまだつらい、ということもあるのだけれど）。えーと、何の話だったかな（またかい）。そうそう、一度、落語を生で見に行つてほしいという話。落語だけでなく、講談、浪曲などの語り芸全般にも同じことがいえる。皆さん、東京落語でも上方落語でも、機会があればぜひ生で体験してみてくださいねっ。

というところで終わってしまったもよいのだが、タイトルの「上方落語の歴史第三回」はどうなったのだということになるので、今回も続きをはじめたいと思う。

えー、今回は、明治初期の上方落語界は、桂文枝という巨星が明治七年に死去した、ということころまでであった。文枝一門のうち、四天王と呼ばれたのが、桂文之助、桂文都、桂文三、桂文団治の四人。この四人が、誰が文枝の名前を継ぐかで大もめにもめるのである。

文枝の死去以降、誰がその名を継ぐのかは世間の注目を集めていたが、文枝の七回忌の席上、未亡人のさとが、

「文枝は、文三に継がせます」

と宣言した。最年長の文之助は、さとに好意をもたれていなかったの、おそらく文三、文都の一騎打ちになるだろうとおおかたは予測していたが、未亡人は文三を指名したのだ。文都はおもしろくないし、文之助も同様である。そこで文三は、一旦、襲名を辞退した。病気がちだから、という理由だったが、本当は、兄弟弟子たちと今もめるのは得策ではないと判断したからだ。やむなく、さとは、文枝の名前を文三預けにしたが、このことよって四人の反目はいっそう激しさを増した。

桂文都は、とうとう桂の名前を捨て、「月亭文都」と名の

ることにした。月亭というのは、「月の桂」という洒落なのだが、世間では「文枝を継ぎてえー」という気持ちのあらわれだと噂するものもあった。結局、文三は、文枝の名跡を翌年に継ぎ、そのことによつて、ますます争いは激化した。文団治は病死し、長老の文之助は、曾呂利新左衛門と改名した。これは、豊臣秀吉のお伽衆だった、頓知で有名な人物で、二代目を継いだといつても一種の洒落というか「逃げ」をうったわけである。このひとは、のちに京都の高台寺の境内で甘党の店をはじめたが、そうなんです、それが有名な「文之助茶屋」のはじまりなのであります。

さて、そののち、月亭文都は、笑福亭松鶴（三代目）、笑福亭福松、桂文団治（二代目）、そして曾呂利新左衛門らとともに「浪花三友派」というのを旗揚げした。「三友」というのは、（文団治の）桂、月亭、笑福亭の二つを集めたという意味である。これに対抗して、文枝は、文三（二代目）、南光、梅枝といった高弟の結束をかため、ここに桂派と三友派という二大勢力の拮抗がはじまったのである。

このあたりで、ふたつの派閥の「色」がはっきりしはじめた。文枝の桂派は、落語家だけで固め、あくまできつちりした噺をするのが身上だったが、三友派は、陽気ににぎやかに派手に明るく……という、色物的要素を含んだ芸風だった。この二派が激突し、しのぎを削った時代、つまり、明治二十年代から三十年代にかけてが、（興津要によると）「上方落語史上空前の黄金時代」なのである。この頃、現在、上方落語として演じられているネタの多くが固まったといわれている。

さて、上方落語の歴史において、このへんの時代のできごととはとてもおもしろくて、落語に興味がないひとでも思わずひきこまれるようなドラマチックな展開があるのだが、そういったあたりをテーマに据えた小説がある。有明夏夫の「骨

よ笑え」である。これは、千日前を舞台にした、落語を中心とした演芸の発展を、芸人や興行師たちのおもわくや栄枯盛衰をからめて描いた作品であり、桂文枝四天王の分裂の最中を時代設定としている。千日前というのは、江戸時代には火葬場があったところで、有名な落語「らくだ」にも登場する。オチで、らくだの死体を火葬場に持っていく途中で、死体とべるべろに酔った願人坊主(乞食)がいれかわってしまい、火葬場で願人坊主を生きたまま焼いてしまう。熱さで目がさめた願人坊主が、

「こうはどこうや」

「こうは千日前の火屋(ひや)。火葬場の意)じゃ」

「冷やでええから、もう一杯」

という箇所の「千日前の火屋」というのは、まさにそれを指しているのだが、明治期になって、火葬場は阿倍野に移転することになった。今でも阪堺電車の駅名で「阿倍野斎場前」というのが残っているが、火葬場が移転した結果、千日前の広大な場所が空き地になった。ここは長年火葬場だったことから、地面のしたは死体を焼いた灰で一杯である。こういう場所は、払い下げようにも、買い手が無い。そこで大阪府は、五十銭という金をつけて、土地をただで払い下げたのだ。そこに目をつけたのが興行主である。安く土地を手に入れると、千日前一帯を歓楽街にしたのである。こうして、千日前には寄席小屋が建ち並び、大阪随一の演芸・娯楽のメッカとなったのである。「骨よ笑え」はそのへんの様子を克明に描いたユーモア小説である。有明夏夫といえば、「浪花の源蔵」を主人公にした「大浪花諸人往来」シリーズが有名だが、この「骨よ笑え」には、「浪花の源蔵」シリーズの登場人物も一部活躍するし、また、「浪花の源蔵」シリーズの一篇「恋の鞘当て異聞」でも、桂文枝一門の分裂が話のサイドストーリー

に組み入れられている。

てなところで、今回はおわり。次回はいよいよあの爆笑王、  
初代桂春団治登場であります。

（了）